

超音波検査実績(体表臓器領域)

超音波診断報告書抄録

受験者氏名 _____ 本郷 一郎 _____

抄 録 番 号	3	年 齢	53	性 別	女
検 査 年 月 日	20〇〇年4月26日			疾患コード	A-3
施 設 名	超音波病院				
[超音波検査所見]					
<p>右腋窩にリンパ節腫大を1個認める。大きさは、18×9×9mm。 形状は不整形。エコーレベルは低。境界平滑明瞭である。 リンパ門側に不均一な高エコー域(脂肪沈着)を認め、周囲の脂肪織と連続している。 リンパ節実質の一部に9mm大の低エコー部分を認める。この部分の血流は豊富である。</p> <p>右鎖骨上、鎖骨下、内胸リンパ節の腫大は認めない。</p> <p>左腋窩、鎖骨上、鎖骨下、内胸リンパ節の腫大は認めない。</p> <p>右乳房、C区域(10時方向)に不整形の低エコー腫瘤を認める。 大きさは25×20×18mm、前方境界線断裂あり、後方エコー減弱。</p> <p>左乳房に異常所見は認めない。</p>					
超 音 波 診 断 *	右腋窩リンパ節転移(疑)、右乳癌				

抄 録 番 号	3	受 験 者 氏 名	本郷 一郎
[主訴・臨床経過・血液検査・他の画像所見・手術所見・考察など]			
<p>主訴) 右乳房腫瘍の精査</p> <p>現症) 45歳、女性。右乳房に腫瘍を自覚し、近医を受診した。超音波検査を施行し、乳癌が疑われたため精査、加療目的にて当院紹介となった。当院外来で、問診、触診、血液検査、画像検査を行った。</p> <p>既往歴) 特記事項なし 家族歴) 祖母：乳癌、父：大腸癌</p> <p>理学所見) 右乳房に約2cmの硬い腫瘍を触知。左乳房は異常なし。右腋窩にリンパ節を触知するが可動性は良好であった。左腋窩にはリンパ節は触知しなかった。</p> <p>血液検査) 腫瘍マーカーを含め、異常所見はなかった。</p> <p>造影CT) 右乳房に濃染する腫瘍を認めた。腋窩リンパ節には異常所見なし。</p> <p>超音波検査)</p> <p>右乳房のC区域に長径20mm、不整形、低エコー腫瘍を認めた。前方境界線断裂(+)。また右腋窩には長径18mmのリンパ節腫大を認めた。リンパ節の一部に低エコー域を認め、同部の血流は豊富であった(写真・スケッチ)。他に腫大したリンパ節は認めなかった。</p> <p>臨床経過および考察)</p> <p>超音波所見から乳癌が疑われ、針生検が施行され浸潤性乳管癌と診断された。一方、腋窩リンパ節の特徴的な所見から、局所的な転移性病変(腋窩リンパ節転移)を考えた。この時点で超音波検査からは右乳癌+腋窩リンパ節転移(疑)と判断した。ただし、他の画像検査では腋窩リンパ節転移を示唆する所見に乏しかったため、術中にセンチネルリンパ節が行われた。センチネルリンパ節として摘出されたリンパ節3個中1個のみに転移所見を認め右乳房部分切除術、リンパ節郭清が施行された。最終的な病理診断でもリンパ節転移は1個であり、今回超音波所見で指摘した病変に一致したと考えられ、他の画像検査よりもより詳細に評価、診断できた症例であった。</p> <p>最終病理診断) 浸潤性乳管癌(硬性型) 右腋窩リンパ節転移</p>			
最 終 診 断 *	腋窩リンパ節転移、浸潤性乳管癌(硬性型)		

公益社団法人日本超音波医学会理事長 殿

公益社団法人日本超音波医学会の定める超音波指導検査士(体表臓器領域)認定試験を受験する基準に十分な抄録であることを認めます。

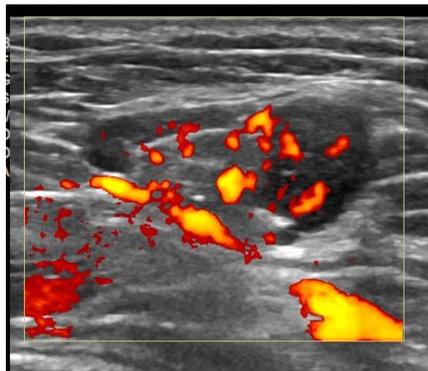
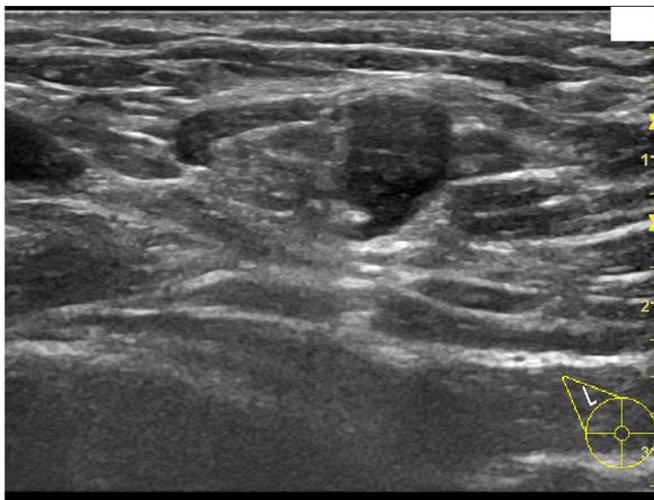
公益社団法人日本超音波医学会
認定超音波指導医または代議員氏名
(自署)

印

指導医の場合記入してください(SJSUMNo -)

[写真貼付欄]

※写真裏面に、受験者氏名・受験領域・抄録番号を付記し、はがれないように貼付すること。あるいは、電子画像をコピー&ペーストで貼り付けてもよい。（写真は1症例につき5枚以内とする）。



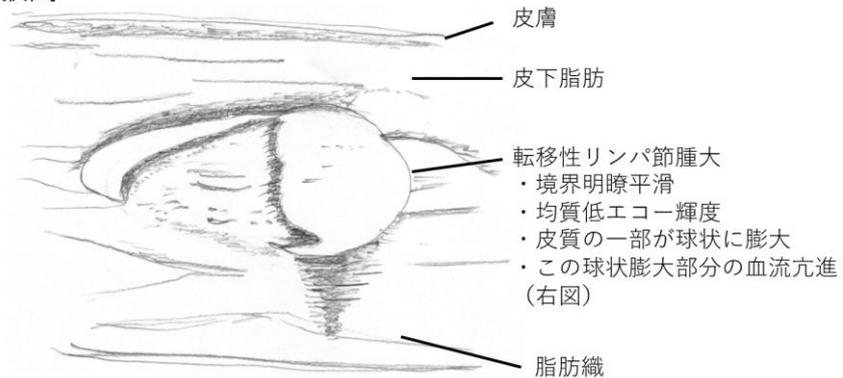
[スケッチ記入欄]

※パソコンのドローソフトを用いて作成したシエーマは認めない。



鉛筆書き可。

腋窩



皮膚

皮下脂肪

転移性リンパ節腫大

・境界明瞭平滑

・均質低エコー輝度

・皮質の一部が球状に膨大

・この球状膨大部分の血流亢進

(右図)

脂肪織